The Aims and Methods of Scholarship in Modern Languages and Literatures

文学研究と言語学

—その新しい目的と方法—

原著者

James Thorpe
William G. Moulton
Fredson Bowers
Robert Spiller
Northrop Frye

東　信行　　桜井　益雄
庄子　信　　諏訪部　仁　共訳

文学研究と言語学

——その新しい目的と方法——

ジェームズ・ソープ
ウィリアム G. モールトン
フレッドソン・バウワーズ
ロバート・スピラー
ノースロップ・フライ

東　信行　桜井益雄　共訳
庄子　信　諏訪部仁

（翻訳権取得）

株式会社　北星堂書店

文学研究と言語学
—その新しい目的と方法—

昭和47年2月5日　第1刷発行

検印省略

訳編者　東　信行／桜井益雄
　　庄子　信／諏訪部仁

発行所　株式会社　北星堂書店
東京都千代田区神田錦町3の12
〒101　振替 東京 16024番
電話　東京 (294) 3301(代)

印刷所　光　明　社

＊落丁・乱丁本はお取替致します　＊定価はカバーうらに表示してあります
1090—31010—7732

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

訳者のことば

本書は James Thorpe (ed.): *The Aims and Methods of Scholarship in Modern Languages and Literatures*, 2nd edition (Modern Language Association of America) の日本語訳に解説と訳注などを加えたものである。原著は編者の Thorpe が序言で述べているような過程を経て出来上がった，言語学および文学研究への本格的手引きであって，初版（1963年）が3万部，改訂第二版（1970年）が1万5千部発行されていることからも知られるように，アメリカ国内を中心に広く利用されている。我々もこの本が言語と文学の研究目的および方法に関する適当にまとまった分量の論集であり，内容も極めてすぐれたものであることにひかれて，3年前に日本語での出版を決意した。しかし翻訳交渉の中でその新しい改訂版が近くだされるということを知り，それを待って翻訳にとりかかったため，訳書の完成は今日になってしまった。

序言の他の四つの主題，つまり言語学，本文批判，文学史および文学批評についての論文は，巻末の解説に紹介してあるように各分野の第一線で活躍している大家によって，それぞれの対象に相応わしくすぐれて個性的に論述されている。これらはそれぞれの著者の見解であって，当然他の見方も考えられるであろうが，アメリカにおいてばかりでなく世界的にも最先端を行くと目される内容が十分に盛られている。英語英文学を学ぶ人・研究する人のみならず，日本文学・仏文学・独文学などの関係者および一般の方々にも有益な論集であることを我々は疑わない。

訳出に当たっては，訳者四人の間で用語・人名・書名などの扱いとか括弧の使用に統一をはかることを考えたのであったが，論文の性格の違い，原著者たちの論述における個性の相違などが存在する以上，翻訳においてもスタイルを無理に画一化することは望ましいことではあるまいということで，結局はかな

り多様な形の訳稿となった。注意すべき点をあげれば，訳注はすべて（ ）の中に入れた数字でもって示してあり，それ以外の数字による参照は原著の脚注に対するものである。また括弧について言えば，（ ）は原文に既に使用されたものの他に，原語や訳語などを添えるためとか，例えば(単)語は「単語」または「語」の意である場合のように（ ）内の語が省略可能であることを示すために用いた。〔 〕は直前の語(句)の言い換えまたは同義的表現をくくり，〈 〉は訳者が補足した情報を示す。

ともあれ，訳者たちが共通に心掛けてきたことは，上述のようにすぐれた原著の内容を読者が正確に理解できるようにすることである。そのためには当然何よりも誤訳があってはならないのであるが，浅学のための思わぬ間違いを恐れる。御教示を乞う。

終わりに，翻訳許可の労をとられたMLAのWalter S. Achtert氏，訳書の出版を引き受け，いろいろ助言して下さった北星堂書店の中土順平氏，編集出版に当たって下さった大黒初枝氏やその他の関係者に心からお礼を申し上げたい。

昭和46年（1971年）11月30日

訳　者

目　次

訳者のことば iii

序　言　ジェームズ・ソープ　東 信 行訳 1

言　語　学　ウィリアム G. モールトン　東 信 行訳 7

本文批判　フレッドソン・バウワーズ　桜井益雄訳 57

文　学　史　ロバート・スピラー　庄子 信訳 99

文学批評　ノースロップ・フライ　諏訪部仁訳 121

解説と訳注

言　語　学　解説・訳注 144

本文批判　解説・訳注・用語表 161

文　学　史　解説・訳注 170

文学批評　解説・訳注 176

序　言

ジェームズ・ソープ

本書は，〈言語あるいは文学の〉学問研究者（scholar）になること，また研究者であることとはどうゆうことか，に係わりをもつ論文集である。学問研究の目的と方法について現代行われている見解のあらましを知ろうとする学界所属の人々に本書は読んでもらいたいのであるが，もともとは，学生を対象として本書は書かれた。というのもアメリカの学問の将来がいずれその手中に委ねられることになるからである。学生諸君にこの論集が学問研究への有益な手引きとして，またたしかな案内書として受取られることを望む。

もちろん，1冊の論文集だけで有能な学問研究者が生まれるわけではない。そのためには，広い学識と，知識を創造的に処理する能力と，それにある程度の幸運とが必要である。しかしまた同時に，我々がもっている素材をまとめて，有益な寄与しうるものに形成するための助けとなる学問的規律（discipline）が必要であるが，そうした規律は，究極的には，学問研究の目的と方法を認識することから生まれる。

この論文集では学問研究の四つの分野——言語学（linguistics），本文批判（textual criticism），文学史（literary history），および文学批評（literary criticism）——が論述される。いずれの場合においても，執筆者は，現代の研究者が直面している根本問題について彼らの考えを提示する。即ち，学者に開かれている研究目的の範囲，直面する基本的な諸課題，その研究の根底にある諸前提，そこで利用可能な方法と手順といったことがそうした根本問題である。この論集を，あるいは直接的なことばで，あるいは間接的含みによって，貫ぬいている種々のテーマのうち，次に挙げる二つのテーマを，それぞれの論文で説かれる命題を考察しながらも，忘れてはならない，と私は思う。

その一つは，何度も繰り返し述べられていることであるが，学問研究のこれらの四つの分野が相互依存（interdependence）の関係にある，ということであ

る。こうして四つの論文に学問研究を割りふるのは，研究機能の便宜上の区分に過ぎず，人の区分を意味するのではない。各論文とも，それぞれ，ある特徴的なタイプの研究について述べたものであって，学問の世界の他のものから分離独立している研究者集団を問題にしているのではない。ここに挙げる論文の中で主張されることであるが，すべての文学研究者 (literary scholars) は，これら四つの学問分野についての少なくとも基本的な把握が必要であり，それぞれの探求様態によって獲得されうる——あるいは既に獲得されている——当面の問題に関連する証拠を利用することができなければ，有効な研究作業もできないのである。文学上の課題の中で特定のどれがその四つの探求様態をすべて必要とするようになるか知れないのであり，学問研究者は，問題を究明するために拠り所となるものをすべて活用してはじめて，十分な確実性をもって，その課題を取り扱うことができるのである。なるほど，個々の学者は一般に，自分は甲よりも乙の研究様態に一層大きい興味とすぐれた技量をもっているのだ，と思うものではあるが，自分の研究を十分なものにしたいならば，学問研究を公言するものは，有望と思われるどんな接近法 (approach) でも追求して，そのとき課題としている事柄を一層深く理解できるようにする能力が必要である。

学問研究をその職業とするものがむしろ避けるべきことは，いずれの研究形態にしても，その軽蔑的戯画にモデルを提供するような作業である。例えば，文学批評とは単に趣味 (taste) を働かせて，個人的意見を表明することに過ぎないとか，文学史というのは文学とは何ら関係のない無用な細かい事実をあれこれ捜し出すことに係わるだけであるとか，あるいは本文批判というのは，作家が書いたことについての臆測に過ぎないものをおおい隠すために，異文 (variant readings) を骨折って集積することであるとか，さらに言語学とは言語を恣意的な構造に押し込めて言語事実を曲げる，ものものしいゲームであるとか言ったようなことである。こうした戯画が露にしているのは，これら四つの学問研究の不適当性ではなく，学問研究の我々の実践上の欠陥である。こうした欠陥は，自分の研究の目的と方法を不確実にしか把握していないことから

しばしば生じる，と思われる。

もう一つのテーマは，あとの三つの論文に暗示されているものであるが，文学研究に共通する目的ということである。文学研究（literary scholarship）という名称のもとに，本文批判，文学史，文学批評といった，相互依存の関係にある研究形態が包摂されるとき，それらに共通して見られる一般的目的は，文学（literature）についての我々の理解を増大するということである。その理想的目標は，すべての文学を理解し，その結果，どんな文学作品をもすべての文学の生きた文脈（context）の中に入れて見ることができることに外ならない。ある特定の研究が文学作品の一部に係わることもあれば，また一つの作品に係わることも，あるいは一群の作品に係わることも，あるいはすべての文学のある面に係わることもある。その研究の直接の対象が何であれ，文学の理解を増大するということが常に文学研究の動的な（dynamic）契機なのである。その目的への到達を目指して，研究者はしばしば方言（dialects）を研究するとか，印刷所に足を運ぶとか，経済史を調べるとか，古典神話を辿るとかして，脇道を通らねばならない。しかしどれほど脇道にそれる必要があっても，文学研究者である限りは，文学の理解を大きくすることが自分の目的であることを常に忘れてはならない。もちろん，文学の理解を増大させるという一般的な目的とは関係のない研究を行なってはならないとする規則はない。しかしながら，もしそういう研究をするとするなら，その場合は文学研究者としての資格で行動しているのではないことを知らねばならない。

上述のような学問研究についての見方に時々矛盾して，そこに内部的な対立を設けてしまうことがある。最も一般的によく見られる対立は，多分，「学問研究」対「批評」であろうが，その他にもいろいろある――「事実」対「評価」，「調査」対「理解」，「知識」対「鑑賞力」など――。このそれぞれにどんな形容語を付けるかによって，自分がどれに共鳴しているかが明らかになる：一方に対しては――それがどれであれ――「衒学的な」「生気のない」「無用の」「末梢的」「不毛の」といった軽蔑的用語を，他方には「みのり多い」「創造的」「核心的」「豊かな」「啓発的」のような賞賛のことばを付けるのであ

る。本書の諸論文に述べられている原理によって見れば，こうした二律背反(antinomies)はすべて学問研究の誤った区分に過ぎない。というのは，学問研究は，知識と理解に係わるものであると考えられており，批評も学問研究の一形態と見做されているからである。どういう形態の学問研究も，それぞれひとまとまりの事実を扱い，研究者が知っているすべてのことに照らしてその素材に批判的評価を下しながら前に進むのである。研究（research）というのは，すべてに共通して見られる，素材の収集，調査，組織化および解釈の過程のことである。ここで妥当する対立，従って当然設定されるべき対立は，学究的である学問研究と無知であるものとの間の対立であり，学問研究に適切な目的を達成する研究とそうでない研究との間の対立である。こうした基盤に立った上でのことならば，上のような賞賛と非難のことばからどれかを選択して用いるということも極めて正当に行なわれうるであろう。

学者はあまり学問研究の目的と方法について話さないものであり，また話さなければならないわけもない。しかしこうした基本的問題についての論述は，——どんな形においてであれ——文学と関係するものはすべてとにかく文学研究であり，すべて同等の価値をもつというような臆測を避ける手だてになりえよう。学者にとっての大きな敵（adversary）は無知であるけれども，混同はその大きな不幸（adversity）である。

* * *

1952年に「研究活動委員会」（Committee on Research Activities）は，以上のような問題に関する報告書を「近・現代の諸言語と文学の研究目的，方法および素材」（"The Aims, Methods, and Materials of Research in the Modern Languages and Literature," *PMLA*, 67, Oct., 1952, 3—37）と題して提出した。この報告書は，「執行審議会」（Executive Council）の求めに応じて用意されたものであるが，本書の以下のページで論じられる，四つの題目に関する4部門に分かれていた。どの部門も当時の委員会のメンバーである人達——順に挙げれば Albert H. Marckwardt, Lawton P. G. Peckham, René Wellek, および James Thorpe——が執筆した。その草稿を交換しあって，手

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

を入れ，この文書のどの部分についてもメンバーから強い異議が唱えられることのないものにした。

1962年に，「近・現代語学文学学会」(Modern Language Association) の当時の主事 (Executive Secretary) であった George Winchester Stone, Jr. 教授が，その文書がパンフレットの形でそれまで広汎に利用されていると報告し，出版後10年が経過したのを記念して，その新しい版を用意してはどうかと提案された。文学研究の諸分野の発展は，過去一世代において実に急速であり，当時1962年において，そのほんの10年前に自分が述べたことをもはやそのまま言おうとはしないと思われるほどであった。したがって，従来のパンフレットの繕いのようなものではなくて，同じ題目についての全く新しい論文集が必要と思われた。今度は上記委員会が協会のメンバーにその四つの題目についての論文執筆を依頼した。それぞれの題目に対して，従来その著作において学問研究への上述のような接近法を強く進めてきた方々が，その目的と方法に関してご自身の見解を述べて下さることになった。

そしてそれらの論文の出版から7年が経過した——その間に3万部発行されている——が，もう一度検討しなおすのが時機を得たことのように思われた。その改訂版とするのが望ましそうなので，4人の執筆者にそれぞれ以前書かれたものを再考して，現在の時点で満足のいくものに改められるようにお願いした。その結果が，この第二版 (1970) である。

本論文集は「研究活動委員会」の後援で出版されてはいるけれども，その委員会の報告書でもなければ，「近・現代語学文学学会」の公式の発表文書 (statement) でもない。現在 *The MLA Style Sheet* (邦訳『MLA英語論文の手引』北星堂発行，最近その新版も出ている) が広く一般の賛成を得ているが，そのような権威をもった慣行 (conventions) の中で研究作業を行なうことは，気持も楽で，都合も好いものである，いや心に解放感さえ与えうる。しかし，学問研究の目的と方法についてかなり細かく論ずることは，取りもなおさず根本的な論争点をもち出すことであって，こうした点については，普遍的な意見の一致をみるなどということは——天啓でもあれば別だが——わかりきった平凡な

ことに逃げ込むことでしか実現できないものである。本書に収めた諸論文に対し，絶対的な定説（dogma）の地位を要求することはできないけれども，その執筆者たちは，学者としてのそれぞれのこれまでの業績に由来するような，既に広く認められた権威をもっておられる。

（東　信　行訳）

言　語　学

ウィリアム G. モールトン

Ⅰ. 序　説 (Introductory)　7
Ⅱ. 言語の構図 (The Design of Language)　9
(a) 統語論 (Syntax)　9
(b) 音韻論 (Phonology)　20
(c) 意味論 (Semantics)　29
Ⅲ. 言語の変化と変種 (Linguistic Change and Variety)　37
(a) 歴史言語学 (Historical linguistics)　37
(b) 地理言語学 (Geographical linguistics)　42
(c) 社会言語学 (Sociolinguistics)　45
Ⅳ. 応用言語学 (Applied Linguistics)　49

Ⅰ. 序　説 (Introductory)

言語学 (linguistics) は，人文(科)学 (humanities) の中で最も科学的であり，また同時に科学 (sciences) の中で最も人文学的である，と評されてきた。言語学は，他の学問のどれかあるものと一緒にきちんと類別することはできないとはいえ，理論と実践の両方において，多くの他の学問と共通するところをもっている。先ず自然科学とは，観察・分類・一般化の方法や，計算可能な単位および記述可能な構造の探究のあり方が共通である。また社会科学とは，個人の活動を通して明らかになるような集団行動に対して関心をもつ点が共通する。さらに人文学とは，人間に独自なもの，つまり人間を「ことばを話す動物」("the talking animal") として，他のすべての生物から最も明確に区別する現象である言語 (language)[1] に対する関心を同じくする。

言語学の目的 (aim) は，人間の言語に関して，できるだけ広くかつ深い知識を獲得することである。[2] また言語学の研究材料 (materials) は，幾千もの言語[3]・方言 (dialects)・下位方言 (subdialects) のすべてであって，現在話されているもののみならず，(保存されていたり，再建する (reconstruct) ことができる限りにおいてではあるが) 過去に話されたものをも含む。従って，

以下の文章において論述する必要があるのは，言語学の方法（methods）と言語に関連して言語学者（linguist）がもつ諸理論（theories）である。

言語学に見られる三つの面を最初から明らかにしておく必要があろう，というのは，文学研究の素養のある人達が言語学に接するとき，しばしば当惑したり，ショックを受けたりさえすることがらであるから。先ず第一に，文学者がある特定の文化において大いに価値ありとされる言語事例〔作品〕を主として研究対象とするのに対して，言語学者は言語の，最も高尚なものから最も取るに足らないものに至るまでの，あらゆる現示体（manifestations）に関心を向ける。言語学者がその研究を大いに価値ありとされる言語にのみ限定しようとしないのは，植物学者がその研究を大いに価値ありとされる花にのみ限定しようとしないとか，気象学者が大いに尊重される天候にのみその研究を限ろうとしないのと同じことである。第二に，文学者が高度に進んだ社会の文学に主として関心をもつのに対し，言語学者は，最も進んだものから最も原始的なものに至るまでのすべての社会の言語に等しく関心をもつ。「原始的な」（"primitive"）言語に関する神話（myths）があって，そういう言語の話し手は主に豚などのようなうなり声（grunts）で意思を伝え合っている（communicate）とか，そういう言語の語彙（vocabularies）は数百語に限られているとかいうことが広く流布している。言うまでもなく，そのような言語は存在しない。なるほど種々の程度に「原始的な」社会というものは存在するが，それらの社会の言語はすべて，最も「進んだ」（"advanced"）社会の言語と同様に，それぞれ独自の形ですばらしく複雑である。[4] 最後に，文学者が文字（writing）に保持されている作品に主として関係するのに対して，言語学者は主として話しことば（speech）に関係する——とはいえ，言語学者も，もちろん文書（written documents）に関心をもつが，それは文書が話しことばと異なる言語を表わしている場合（例えば，英語の書きことば（written English）が多くの点でその話しことばと異なるように）とか，もはや話されていない言語（例えば，ゴート語（Gothic）[5] とか古フランス語（Old French）[6] のような言語）を明らかにする場合とかである。文字は人間の生みだしたすばらしいものであって——重

要性では恐らく言語そのものを別とすれば他の何物にも劣らないであろう。しかし，人間の長い歴史的展望から見れば，文字はきわめて新しい発明であり，また文字の短い歴史を通じて，それは殆んど常に既に話しことばとして存在する言語を記録するための工夫として用いられてきたのであって，何か新しい種類の言語としてではない。従って，文字（言語）（writing）ではなくて，音声言語（speech）が言語学の主たる研究主題ということになる。[7]

II. 言語の構図 (The Design of Language)[8]

現在広く行なわれている言語理論が示唆するところでは，人間の言語は次に挙げる三つの部門から成る，抽象的な記号体系（symbolic system）と見ることができる：即ち，その3部門というのは，一方の端にあって，外部的な，耳に聞こえる音声（audible sound）の世界（というのは人間のすべての言語において送信（transmission）のために用いられる媒体は音声であるから）と結びつけられる音韻部門（phonological component）と，もう一方の端にある，外部的な，事物と思想（things and thoughts）の世界（即ち人間が言語を使用するとき話題にするすべての事物）と結びつけられる意味部門（semantic component）と，この二つの部門の間をつないで，言語全体の根底にある音声と意味の相互関係（sound-meaning correlation）における中心要素として存在する統語部門（syntactic component）である。以上の三つの部門が，それらの相互関連と合わせて，言語の文法（grammar）を構成する。このように統語組織（syntax）が中心的位置を占める[9]から，先ずこれから我々の論述を始めることにする。

(a)統語論 (Syntax). 人間が言語によってコミューニケイションを行なうとき，そこで用いられる最小の言語単位（linguistic unit）は何であるか？ 一つの見方よりすれば，それは（単）語（word）である。例えば，"When is John coming?"（ジョンはいつきますか）という質問に答えて，Tomorrow（あす）という1語で応ずることもできる。この発話（utterance）を口にする（say）ときは，それは事実1語から成る発話である。しかしながら，この発話を理解

する (understand) ときは，それは John is coming tomorrow (ジョンはあすきます). という文を省略したものである。こうしたことから考えられることは，一層広い見方よりすれば，言語によるコミューニケイションのときに用いる最小の言語単位は単語ではなくて，(完全な (full *or* complete)) 文 (sentence) である。上記の質問に John is coming tomorrow と言って答えるときのように，それは直接に文そのものであるか，ただ Tomorrow——これは John is coming tomorrow の省略と解釈されるものであるが——と答えるときのように，間接的に文であるのか，のどちらかである。我々が言語において用いる文の多くは，むろん省略文 (elliptical sentences) であるが，どんな省略文であれ——ここがこの例文の肝心な点でもあるのだが——我々がその元の文と思われる完全な文を補うことができない限り，それは真正の伝達 (内容) (message) にはならないのである。

こうした例証から考えられることは，どんな言語であれその統語部門もまた次の三つの部分から成ると見るべきであろう，ということである：即ち，それは我々の文の理解の仕方を表示する深層構造 (deep structure) と，我々が文を口にする仕方を表示する表面構造 (surface structure) と，この深層構造と表面構造を相互関係させる一組の変形規則 (transformational rules) である。統語組織のこの三部構成観 (tripartite view) によって，完全文と省略文の相違の説明がつく：省略文においては，変形規則がその根底にある深層構造(underlying deep structure) の一部の削除 (deletion) を行なっている，と想定することができよう。またこの見方によって，我々が文を口にする仕方 (即ち表面構造) と文を理解する仕方 (即ち深層構造) との間の他の相違をすべて説明することが可能となる。

次の例を考察してみよう：

(1) The dog bit the man.

(2) Did the dog bite the man?

(3) The dog did not bite the man.

(4) The dog DID bite the man.

(5) The man was bitten by the dog.

(6) Was the man bitten by the dog?

口にして発音するときには，これらの文はすべて互に著しく異なっている。しかし理解するときは――従って深層構造にあると想定されるときであるが――それらは殆んど同一（identical）である。それらすべてに共通する意味は，文(1)に現われているものがその全部である：即ち，the dog, bite, Past Tense（過去時制），the man という諸要素（elements）が「かみついたのはその犬であって，その男ではない」となるように配列されている（arranged）（つまり，The man bit the dog ではない）ということである。残りの文はいずれも，この共通の意味プラス一つまたは二つの新しく加わった要素から成っている。文(2)には新しく加わった要素 Question（疑問）があり，文(3)には Negation（否定）という要素が加わっており，文(4)には多分 Emphasis（強調）と称することができる，新しく加わった要素があり，文(5)には Passive（受動）という要素が加わっており，そして文(6)には Question と Passive が加わっている。次にこうした深層構造に変形規則が働いて，上記のような非常に相異なった表面構造を産み出すことになる。

言語の3部門――音韻部門・統語部門・意味部門――のいずれについても，我々はそこにかかわる言語要素（elements）とそれらの配列（arrangements）の両方を記述する必要がある。統語部門について言えば，その要素は，通例，形態素（morphemes）[10]（ギリシア語 *morphé* 'form'（形）に由来する）と呼ばれる。形態素のあるもの，例えば，dog, bite, man などは，深層構造と表面構造の両方に生起する。また形態素の他のあるもの，例えば，（英語において）Question や Passive などは，深層構造にのみ直接生起する――もっともこうして根底に現われていることは，語順（word order）などの表面構造上の特性によっても間接的にあらわにされることではあるけれども。さらに形態素の他のあるもの，例えば，助動詞（auxiliary verb）do や受動文の by などは，変形規則によって導入されるもので，表面構造にのみ生起する。またさらに形態素の他のあるもの，例えば Past Tense などは，深層・表面の両構造に生起

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com